

日向市教育研究所

I	研究主題	3-3-1
II	主題設定の理由	3-3-1
III	研究目標	3-3-1
IV	研究仮説	3-3-1
V	研究組織	3-3-2
VI	研究内容	
1	「よのなか教室」について	3-3-2
2	各教科・道徳における「よのなか教室」	3-3-3
	(1) 小学校6年算数科における実践	3-3-3
	(2) 道徳の時間における実践	3-3-3
	(3) 中学校英語科における実践	3-3-4
3	中学校の生徒指導・学級経営における「よのなか教室」	3-3-6
	(1) 不登校の傾向の生徒の分析	3-3-6
	(2) キャリア教育の視点を生かした行事の活用	3-3-6
	(3) 多様な「よのなか教室」の実施	3-3-6
4	ストーリー性のある「よのなか教室」	3-3-7
	(1) 学習内容の連携	3-3-7
	(2) 授業以外での“気付き”を高めるための取組	3-3-8
5	6年生「よのなか教室」	3-3-8
	(1) 6年生への依頼と意識付け	3-3-9
	(2) 具体的な実践	3-3-9
	(3) 児童の変容	3-3-9
6	保護者向け「よのなか教室」	3-3-9
VII	成果と課題	3-3-10
○	引用文献・参考文献	
○	研究同人	

I 研究主題

児童生徒の学ぶ意欲を高める指導の在り方
～キャリア教育の視点を生かした指導の工夫改善を通して～

II 主題設定の理由

本市では、平成25年度に、まちぐるみでキャリア教育を推進するために「日向市キャリア教育支援センター」を日向商工会議所内に開設した。以後、様々な取組を行ってきたが、特に、「日向の大人はみな子供たちの先生」を合い言葉に、地域で働く大人が、子供たちに働く喜びと苦勞を本気で語っていただく「よのなか教室」を各小中学校で実施することに力を入れてきた。この「よのなか教室」を核としながら、子供たちの一貫した育成を市民運動として広げていくことをねらいとして、産官学の更なる連携を模索しているところである。

このような背景がある本市において、子供たちが「何のために学習するのか」、「これからどう生きていきたいか」等を考えさせる、日々の学習を進めていけるように、キャリア教育の視点を生かした学習指導を工夫改善することは、子供たちの学習に対する意欲を高め、達成感を味わわせる意味でも意義深いと考える。さらに、今学校で学んでいることが、日常生活や社会生活の中で生かされていると実感できたとき、学ぶ意欲がさらに向上し、学ぶ意味を実感でき、確かな学力が身に付くことにつながるのではないかと考える。

また、キャリア教育の視点を学習指導だけでなく生徒指導でも生かすことで、本市の教育的課題の1つである不登校等の改善につながるのではないかと考え、副題を「キャリア教育の視点を生かした指導の工夫改善を通して」としたところである。

本研究所は、本年度の研究の進め方を、各研究員が所属校の課題に応じてテーマを設定し、指導主事やキャリア教育支援センターのコーディネーター等の個別支援を受けながら、所属校の他の教職員も巻き込みながら実施する方法に変更した。また、年に数回、研究員や指導主事、他の教職員、諸関係機関の方々にも集まっていたいただき、研究の進め方等に関する意見交換を行うカンファレンスを実施する。更に、研究に関する県外出張等は各研究員が自分の課題に合ったところを選定し視察等を行うようにする。

この研究の進め方により、各研究員の成長や各学校の研究の活性化、及び本市の教育の質的向上を図りながら本主題に迫り、児童生徒の学ぶ意欲を高めていきたい。

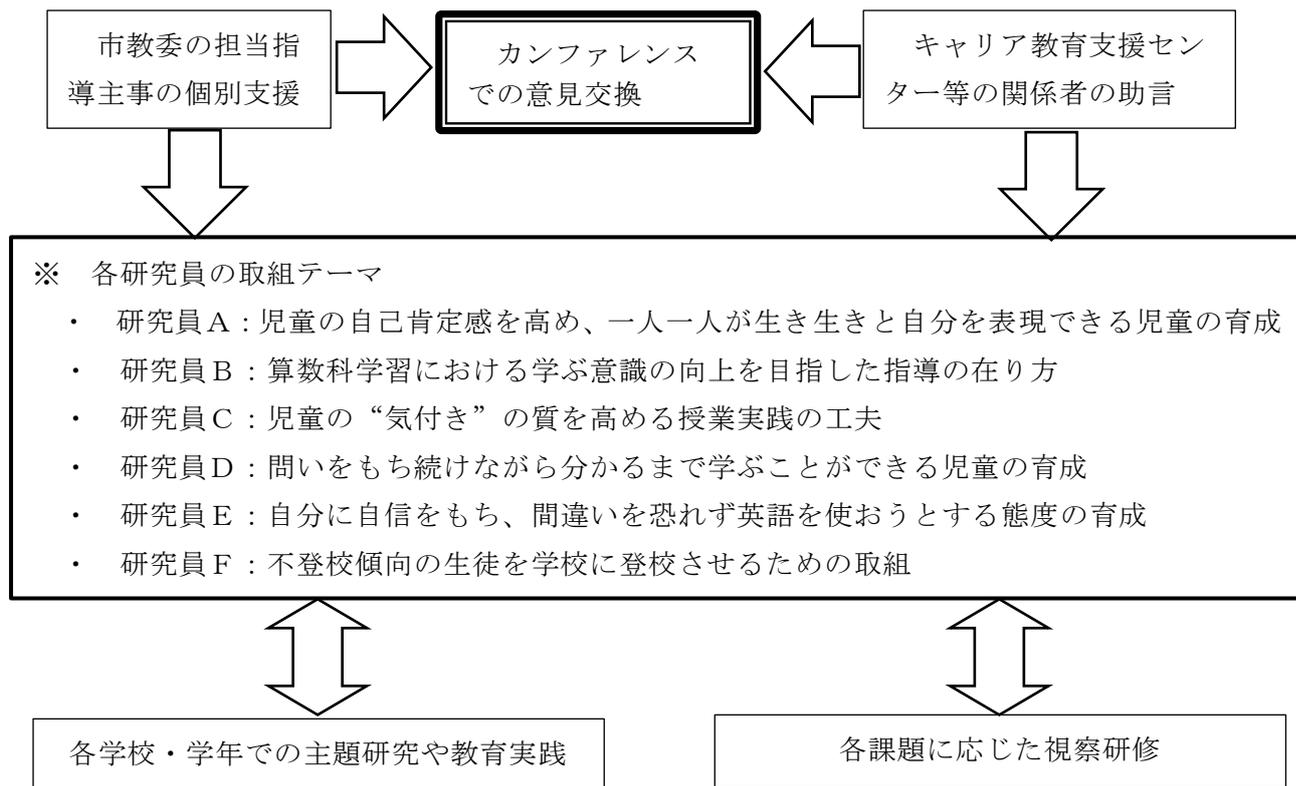
III 研究目標

キャリア教育の視点を生かした教育活動（よのなか教室）を通して、子供たちの学ぶ意欲を高め、確かな学力、生きる力を身に付けさせるための学習指導、生徒指導の在り方について究明する。

IV 研究仮説

小・中学校において、キャリア教育の視点を生かした学習指導や生徒指導を実践すれば、子供たちが目的意識を高め、学ぶ意欲を高めることができるであろう。

V 研究組織・方法



VI 研究内容

1 「よのなか教室」について

本市において進めるキャリア教育は、「日向の大人はみな子供たちの先生」を合い言葉として、学校だけでなく、企業や家庭、地域も含めて、日向のまちぐるみで取り組み始めている。その中核として、日向で働く大人が「よのなか先生」として、日向市内の小学校、中学校、高等学校を訪れて、子供たちに「働く喜びと苦労」を本気で語っていただく「よのなか教室」が行われている。「本物」（働く大人、実社会の技術や製品、企業の理念や活動など）に触れる（聞く、体験することを通して、自らの将来への夢や希望を描き、それ



<体験も交えながらの「よのなか教室」の様子>

に向かって努力しようとする態度を育てるとともに、働くことの喜びや苦労を知り、自らの生き方について考えようとする態度を育てることを目指して進めてきている。

スタートしたばかりの「よのなか教室」は、総合的な学習の時間における職業講話が多く、「よのなか先生」の話を聞く単発の授業で終わることもあった。しかし、本市では各学校において実践を積み重ねていくうちに、様々なアイデアや工夫が生まれはじめている。各教科や道徳、学級活動の学習活動の中に「よのなか教室」をうまく組み込み、本時のねらいの達成につなげるとともに、学ぶ意欲を高める実践も行われ始めた。また、1単位時間ではなく教科等を横断して、ストーリー性をもたせた学習を展開したり、上級生や卒業生を「よのなか先生」として授業に招き、学ぶ意味を考えさせたりするなど、多様な取組が見られるようになった。

2 各教科・道徳における「よのなか教室」

(1) 小学校6年算数科における実践

小学6年生算数科の「およその面積」を求める学習で、淡路島の面積を三角形に見立てて底辺と高さを実測し、面積を求める内容がある。この「およその面積」を求める学習が、「社会の中のどんなことに役立っているのか」、「どんな仕事につながっていくのか」を実感することができるよう、建設会社の方を講師として招聘し、実際に講話をしていただいた。

児童は、「およその面積」で学習した考え方や、算数で学習した三角形の面積を求める公式など、実際に講師が関わった仕事で使われていることを知り感激していた。円の面積を求めるときにはいくつかの三角形に区分して求める方法や、三角形の面積を三辺の長さから求める方法など、高等学校で学習する公式が紹介され、算数から数学への広がりについても触れさせてもらったと同時に、上級学校の数学に対して興味を示した児童もいた。

授業では、これまでに学習した内容を活用しながら、実際に小学校の敷地の面積を求めることも取り扱った。敷地を、「およその形」に見立てて、「およその面積」を求める方法が、実際の建築現場でも使われていることを知り、子供たちは意欲的に活動していた。また、学校の敷地の3倍以上の広さの工場建設に関わっていることも知って、仕事へのあこがれを抱く契機ともなった。

「よのなか先生」が最後に、「私はこういう仕事（建設業）をしていて、子供の頃に勉強した算数が今役に立っている。私の場合は算数だったけれど、今勉強している内容のどの教科が、どの部分で将来役に立つかは分からない。だから毎日の勉強を一生懸命頑張ってください。」という内容のお話をされ、児童も学習することの大切さを学ぶことができた。

下記に示すのは授業後の児童の感想である。

- 算数の公式も仕事で使われていることを知って勉強しなければいけないと思った。
- 今の勉強の内容を今後使うこともあるかもしれないので、しっかりと勉強したい。
- 身近なところで算数の公式が使われていることが分かった。どういう仕事で算数が使われているかさらに調べてみたい。

これまでに、学ぶ意味について深く考えたことのなかった児童にとっては、学ぶ有用感を感じることができた。感想にもそのことが表れていた。

(2) 道徳の時間における実践

道徳の時間において「よのなか先生」を招聘した実践が少しずつ行われ始めている。本研究所では、小学校1年生と3年生の学級で実践を行った。

小学校1年生の実践では、学校の技術員さんの仕事を通して、日頃お世話になっている人に感謝の気持ちをもつというねらいで授業を行った。授業の展開の途中で本人が「よのなか



算数科における「よのなか教室」の様子



学校敷地の面積を求めている様子

先生」としてサプライズで登場し、児童が技術員さんの「想い」を直接聞きながら価値に迫る活動を行い道徳的实践力を高めることができた。

また、小学校3年生の実践では、「よのなか先生」に最初から登場していただき、「よのなか先生」の話や生き方そのものを教材化した。

授業のねらいは、「よのなか先生」の話を聞き、自分のよさに気づき、自信をもって、明るい気持ちで生活していこうとする態度を育てること、「よのなか先生」の経験談から生き方や考え方にふれ、次に自分自身のことを振り返って自分の好きなどころを探し、自分のよさを生かしたり、前向きに明るい気持ちで生活していこうとしたりするきっかけにしていくことである。

話の柱として、現在の仕事（英会話教室）に携わるきっかけ、好きだった英語を生かすために海外に行った経験を中心に話をしていただいた。特にケニアに行った話では、ケニアに行く前の不安、行った感想についての内容であった。「よのなか先生」が自分の得意なことを生かして、明るく前向きに生きてきたという具体的な話をしてくださり、児童一人一人は、それぞれ自分の素敵などころを見つけて、それを今後生かしていこう、行動に移していこうとする気持ちをもつことができた。

下記に示すのは授業後の児童の感想である。

- 自分のしたいことをするなんてすごいなと思いました。
- 赤ちゃんがいるのにケニアに行くのは、すごく勇気があるんじゃないかなと思いました。すごく勇気のある方だなと思いました。
- 話を聞いて、日本とは違うところがあるということが分かって、すごく嬉しかったです。私も他の国のことを調べたくなりました。
- だいたいをスワヒリ語でポレポレということが分かりました。ぼくも英語のことをもっと学び、外国に行って色々な人と友達になりたいです。

自分の好きなどころについては、「元気なところ」「明るいところ」「学校を休まないところ」などを見つけていた。自分の好きなどころを発表し、共感し合うことで自分の自信へと繋がった。今回の授業を通して、「よのなか先生」の行動力や生き方に驚き、自分のよさを生かすことや、前向きに行動する大切さに気付くことができた。

(3) 中学校英語科における実践

「よのなか先生」の体験に基づく講話に直に触れ、感じることで、中学生としての望ましい勤労観、職業観を身に付けることと、英語に対する関心を高め、学習意欲の向上を図ることを目的として、「よのなか教室」を実施した。

「よのなか先生」からは、世界には学校に行きたくても行けない子どもたちが5900万人以上いるということや、日本語だけで生活できる国は数少ないということ、インターネット上で得られる情報量は、英語だと日本語の100倍以上だということなど、学習ができることや英語が使えるということがどのようなことなのかについて話して下さった。また、



道徳における「よのなか教室」の様子



英語科における「よのなか教室」の様子

「よのなか先生」の働き方や生き方に関する考え方として話された、「自分にできることは何かを考えること」という言葉が印象に残っているという生徒が多かった。「よのなか教室」の最後に、語学学校を開こうと思った動機について、「子供たちに、世界に目を向けて、人のために生きることができる人に育ってほしい」と話しており、生徒たちに向けて、「誰かのために生きる人生は素晴らしい」というメッセージを残してくださった。

「よのなか教室」後の生徒の感想には、よのなか先生」の体験談やメッセージを聞いて、海外の生活に興味をもち、英語に限らず学習に対する意欲の高まりが感じられた。

- 「誰かのために生きる人生は素晴らしい。」という言葉が一番心に残りました。これを聞いて自分にできることは何かを考えようと思いました。
- 今日のお話を聞いて、今、勉強していることは全て将来必要になってくるんだなと思いました。将来のことはわからないし、苦手な教科もあります。でも、世界には勉強ができない子どももいるので、これを幸せだと思って生きていきたいです。
- 今日のお話で、自分のためだけでなく人のためになることをする生き方は素晴らしいと思いました。また、外の世界を体験することで、今までの自分の考えが変わるものだなと思いました。

「よのなか先生」の話をもとにさらに生かすために、下記の視点で授業改善を行った。

ア 前向きにコミュニケーションを図ろうとする雰囲気づくり

帯活動として、英語学習の雰囲気づくりのために、2人組での簡単な会話活動を行った。1つ目に、授業開始時に行う天気などを尋ねる対話、2つ目に、毎日1つずつトピックを変え、簡単な英会話を行わせた。会話をする際は、①あいさつ、②表情、③アイコンタクト、④リアクションを意識させ、できるだけ自然な会話を続けさせるようにした。



授業を行う上での約束事

イ 「できた」と実感する場面の設定

一単位時間の目標を明確にし、授業の最後のまとめの時間を工夫した。まとめの時間として、教科書の本文を読んで分かったことや、学習した言語材料を使った英文などを自分自身で考え、その内容を友人と共有し、理解を深めるようにした。友人と考えを共有したあと、全体に発表させることで、自信をもって発言できるようにした。



2人組での会話活動の様子

ウ 学び合いの場面の設定

文法導入時や演習問題を解く際に、必ず個人で考える時間と、隣の席や近くの席の生徒と、教え合ったり、解答を確認し合ったりする時間を設定するようにした。その際、ただ答え合わせをするだけでなく、なぜそうなるのかについて話したり、一人だけでなく数名の意見を聞いたりして理解を深めるよう促した。



互いに学び合っている様子

ちなみに、前述の小学校3年の道徳と中学校英語の「よのなか先生」は同一人物である。同じ「よのなか先生」であっても授業の中での「よのなか先生」の活用の在り方を工夫することで、各教科や道徳等、幅広く実践できることが分かった。

3 中学校の生徒指導・学級経営における「よのなか教室」

(1) 不登校傾向の生徒の分析

ア 自分を見つめるアンケートによる分析

自尊感情や委員会活動を通して所属感などの実態を調査するために右のようなアンケートを実施した。アンケート結果から「1、自分のことが好きだ」「2、自分は人から必要とされている」「7、自分は役に立つ人間である」の設問で全体的に低い状態がみられた。不登校傾向の生徒は特に多くの項目で数値が平均以下になっている。

学級の傾向として、特に「自尊感情」が低い傾向にあることが分かった。2・3学期に

自分を見つめるアンケート	
21HR No. 〈 〉 《 》	
1、自分のことが好きだ	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
2、自分は人から必要とされている	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
3、自分には良いところがある	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
4、自分は学級や学年のために何が行動している	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
5、係活動は責任をもって活動している	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
6、自分は目標に向かって頑張っている	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
7、自分は役に立つ人間である	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
8、人のために何かをしたいと思う	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
9、世の中のために何かしたいと思う	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない
10、何事にも積極的に生活できている	1、思う 2、まあ思う 3、あまり思わない 4、思わない

は自尊感情を高める手立てを行ってきた。委員会活動を生かしながら、役割達成による称賛、学級の生徒からの感謝の言葉など承認欲求を満たしてあげられる活動を多く設定し、その中で、不登校傾向の生徒には、登校できた日に称賛、係活動でも称賛、しっかり承認する声掛けをした。また、適宜本人と教育相談を実施し、欠席の状況や学級での頑張り、これからの学校生活の課題を丹念に話し合ってきた。

(2) キャリア教育の視点を生かした行事（職場体験学習）の活用

職場体験学習は、不登校傾向の生徒に限らず、これから先の将来を意識させるために、不可欠な学習である。この活動による教育的意義には以下のものがある。

- ・望ましい勤労観、職業観の育成
- ・学ぶこと、働くことの意義の理解、及びその関連性の把握
- ・啓発的経験と進路意識の伸長
- ・職業生活、社会生活に必要な知識、技術・技能の習得への理解や関心
- ・社会の構成員として共に生きる心を養い、社会奉仕の精神の涵養 等

〔文部科学省：中学校職場体験ガイドより〕

生徒にとって 自己の理解を深め、職業の実像をつかみながら、望ましい勤労観、職業観を身に付けることができる職場体験学習へ参加させるために、6月末、7月初めに個別の教育相談を行った。内容は、①職場体験で学びたいこと、②現在の進路意識 の2項目である。

(3) 多様な「よのなか教室」の実施

中学校第2学年の「よのなか教室」の実施に関して、本年度は下記のような活動計画を立てた。

平成28年度 よのなか教室 テーマ【夢への道】		
第1回	働く意義と必要な力	書道家・公務員・起業家
第2回	今を生きる子ども達 (保護者向け)	水永正憲氏
職場体験学習 2日間		
第3回	なぜ学ぶ?なぜ働く?	よのなか先生2名・生徒2名・教員1名
第4回	よのなか教室で学んだことの発表会『参観日』	各学級担任
第5回	高校よのなか教室	高校の教職員、生徒
○ 進路選択を意識させつつ、その先の将来を膨らませられるような活動を計画した。 学ぶ意義・働く意義をパネルディスカッションなどで考えられるように設定した。		

「よのなか先生」から、様々な話をさせていただくことにより、多様な人生観や生き方を学ぶ機会となっている。また、学校で受けた指導が現実のことに符合していることに気付くことができ、大人になった時に必要となる力を育むきっかけを得ることができる活動となった。

以下の文は、「よのなか教室」翌日の生徒の生活の記録(日記)である。



書道科による実演・講話の様子

今日のよのなか教室がすごく楽しかったです。わかりやすい言葉でとてもワクワクしました。私のやりたい仕事とつながる話だったので、役に立つ話ばかりでした！

4 ストーリー性のある「よのなか教室」

(1) 学習内容の連携

小学校1年生の学習内容に、児童に自分の身の回りの人とのつながりに気付かせたり、それらの人とのつながりに感謝や尊敬の念を抱かせたりすることを主眼に置いた学習や単元がいくつかある。それらの学習や単元は、関連性を理解して、つながりをもった指導を行うことで、その効果がさらに向上すると考えられる。

そこで、今回の実践では、児童の“気付き”を高めることができる学習や単元を精選し、それらを大きな学習のつながりとして考えることとした。

学習内容	主な目標	教科及び学習活動	時数
お世話になっている人	日ごろお世話になっている人に感謝しようとする心情を養う。	道徳の時間	1
ひろがれえがお	家族の温かさによって支えられていることに気付き、家族の一員として自分にできることを考える。	生活科	8
手伝いパワーアップ大作戦	家庭内での家族の仕事について児童自らが気付き考え、自分にできる仕事を手伝いとして実践する意欲を高める。	学級活動	1

道徳の時間の「お世話になっている人」の学習は、日ごろお世話になっている人たちに気付き、感謝の心情を養うことをねらいとしており、この学習を通して、周囲の人々への関心が高まってくると思われる。そこで道徳の時間の学習を起点として教科の学習や特別活動といった横断的な学習を行うことで、道徳で学んだ価値について児童が心情をさらに高めたり家庭や学校などで実践的に活動に取り組んでいったりすることができるように計画を立てた。

次に、生活科の「ひろがれえがお」の学習において、児童の身の回りのお世話をしてくれている保護者について関心を高め、どのようなお世話をしてもらっているのかに気付かせた後、自分たちでできるお手伝いはないかを考え、それを実際に家庭で取り組む活動へとつなげていった。

その後、そこから学級活動へつなげていき、家庭内での家族の仕事について児童自らが気付き考え、自分にできる仕事を手伝いとして実践するための意欲を高める授業を行った。

このように、“気付き”というものを扇の要として、各教科や学習活動を横断的に繋げていくことで、自分の身の回りに対する“気付き”の質を高めることができると考えた。また、教師自身も各学習を関連させることで、児童の“気付き”の変化を意識しながら授業を行うことができた。

さらには、道徳の学習と学級活動で地域人材を活用した授業を行うこととした。道徳の時間の学習では地域人材の活動を取り上げることを通して、日常生活において実は自分たちのまわりにお世話をしてくれている人がたくさんいることに気付くきっかけとし、より効果的に具体的な気付きをさせるために地域人材を活用した。また、生活科で活動した後、学級活動の授業で児童が自分のしたお手伝いをふり返り、より質の高い、家族のためになる手伝いに“気付く”ために地域人材を活用して、実践する意欲を高めていった。



道徳の授業で活用した写真資料



手伝いへの意欲を高める体験学習



小学校学級活動における「よのなか教室」

5 6年生「よのなか教室」(小学校1年生の算数科に関連した実践)

1年生の児童は、「どうして勉強するのか」を考えたことがなく、学習と生活との結びつきを想像できない実態にある。児童に現在の学習が日常生活と深く結びついており、学習することの必要感をもたせたい。そこで、小学6年生を「よのなか先生」として活用した。

本校の6年生を「よのなか先生」として選んだ理由は下記のとおりである。

- ① 児童が、日頃から学校生活の中で、給食、清掃、朝の準備等、お世話になっている点が多く、身近な先輩であるため。
- ② 児童にとっての「よのなか教室」とは、将来の社会的自立に向けた見通しをもたせることではなく、学校生活や家庭生活など、近い見通しの中で学習事項の活用をとらえさせることをねらいとしたため。
- ③ 6年生は、1学年の学習内容や本学級の児童の実態をよく把握しており、児童の発達段階に即した話ができるため。

(1) 6年生への依頼と意識付け

6年生を「よのなか先生」として活用するにあたって、6年生児童に依頼と意識付けをした。依頼及び意識付けについては、文書の配付と6学年担任による伝達を通して行った。

文書には、「よのなか教室」の目的と内容を6年生に伝わる言葉で分かりやすく提示した。また、6学年担任からは、1学年の実態を伝えていただき、1年生の児童にも分かりやすい説明を心掛けるよう指導していただいた。

(2) 具体的な実践

6年生による「よのなか教室」を2回にわたり、実践した。実践内容は以下の2つである。

6年生による個別指導	よのなか教室
 <p data-bbox="177 622 459 819">6年生が、やさしく教えてくれたよ。</p>	 <p data-bbox="1161 566 1469 763">遠足のおかしを 買うとき、たしざん が使えるよ。</p>
<p>【実践内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「たしざん(2)」の文章問題や「かたちづくり」の活用問題について、6年生に個別指導をさせる。 ○ 1学年児童2名に対し、6学年児童1名を配置し、児童の実態に応じて指導をさせる。 	<p>【実践内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1学年の算数科の学習が日常生活の中でどのように生かされたのかを6年生に話させる。 ○ 算数科の学習の楽しさを6年生に話させる。 ○ 算数科の学習で使う道具の紹介をさせる。

(3) 児童の変容

「よのなか先生」を活用した実践を終え、活動の振り返りをした。振り返りの内容としては、感想の交流と、6年生へお礼の手紙を書くことの2点である。

これらの振り返りから、下記のような感想が上がった。

- 6年生がとてもやさしく教えてくれた。
- コンパスを使うのが楽しみになった。
- 遠足のおかしの買い物を自分でしたくなった。
- また、6年生に教えてもらいたいと思った。
- 遠足の話が難しかった。

上記のように、前向きな感想が多く挙がった。それは、日頃から親しく接している6年生と一緒に学習をすることができたことが理由であるように感じられる。また、学習したたしざんの学習が日常の買い物場面で使えることを聞き、買い物に対して意欲が出てきている様子も見受けられた。コンパスや三角定規などを具体物として掲示したことで、今後の算数の学習に対して意欲が向上した様子でもあった。一方で、学習を生活に活用する話については、具体物等もなかったために、想像しづらかった児童も見受けられた。

6 保護者向け「よのなか教室」

生徒の進路意識や将来への見通しをもたせるためには、保護者の意識を高める必要がある。

そこで、日向市キャリア教育支援センターの水永氏に依頼し、



社会の中で「子供たちが置かれている状況」について、「よのなか教室」を実施した。1学期の参観日の懇談を学年懇談にすることで参加者も増え、学校の取組を見てもらう良いきっかけにもなった。保護者向けの「よのなか教室」の実施を増やしていくことは、今後の日向市のキャリア教育の充実につながっていくと考える。

VII 成果と課題

1 成果

- 子供たちが日々学習している教科、道徳、特別活動において、学ぶ意味や必然性を理解することができ、日々の学習に対する意欲の高まりが授業後の感想からもうかがえた。
- 身近な6年生を「よのなか先生」として活用したことで、学級の児童の実態に応じて柔軟に対応でき、学習意欲の向上につながった。また、1年生の児童のみならず、6年生児童にとっても、人との関わりの面で学びがあった。
- キャリア教育の視点で学級経営を行い、各種行事等でも「よのなか先生」を効果的に活用できたことで、親和的な学級の醸成につながるとともに、前年度不登校傾向にあった生徒の欠席日数が大幅に改善された。
- 「よのなか先生」の話聞くことで、今後の自分自身の生き方に夢を抱くようになったと同時に、職業人に対する畏敬の念も芽生えてきた。

2 課題

- 継続的に実践することが効果をあげていることが多いため、取組を継続させるための手立てを検討していく必要がある。
- 6年生を「よのなか先生」として活用する際には、6年生の特別活動の話合いと連携させて、6年生がさらに主体的に課題解決ができる手立てが必要であった。
- 「よのなか先生」を道徳で活用する際にはねらいとする価値に迫ることができるように、「よのなか先生」と綿密な打合せをする必要がある。

○ 引用文献・参考文献

文部科学省 小・中学校学習指導要領解説 小・中学校キャリア教育の手引き
 中学校職場体験ガイド

宮崎県教育委員会 宮崎県キャリア教育ガイドライン 第二次宮崎県教育振興基本計画

○ 研究同人

所長	今村 卓也 (教育長)	研究員	佐藤 美幸 (富島中学校教諭)
副所長	塩月 勝比呂 (学校教育課長)	研究員	春田 一樹 (富島中学校教諭)
研究員	俵 晋一郎 (富高小学校教諭)	事務局	高森 賢一 (学校教育課長補佐)
研究員	雨崎 雄 (富高小学校教諭)	事務局	鈴木 重仁 (学校教育課教育指導係長)
研究員	吉田 博喜 (大王谷学園初等部教諭)	事務局	岩原 教昌 (学校教育課指導主事)
研究員	吉野 里美 (寺迫小学校教諭)		